白保小学校創立130周年に寄せて

米盛重保

郷里白保を離れて半世紀の年月を経て、私は今年73歳の生まれ年を迎え、老境の心境のせいか、この頃郷里白保の原体験、原風景の思い出がよみがえってくる。

くしくも今年は母校白保小学校が創立130周年記念の節目を迎えた。この機会に小学校時代の出来事、思い出をつづってみることにした。

「白保小学校の原風景」

私たちが白保小学校に入学したのは1955年、卒業は60年、創立70周年目であった。運動場南側のガジュマル、アコウ、デイゴの3本の老木と体育館横の気根の発達したアコウの大木は小学時代を思い起こす懐かしい木である。自然が豊かな校内、周辺の緑地には年中多種多様なチョウやトンボ、ホタル等の昆虫とアオバト、キジバト、フクロウ、アカショウビン等の貴重な鳥類が飛翔していた。校舎は今の体育館の場所に木造瓦葺の平屋教室だった。木材の床、廊下の雑巾がけを当番で行った。3年からコンクリート2階建ての教室になり、校舎建設のためにPTA総動員でバラスの採取拠出をやらされた。

「先生方の顔ぶれ」

私たちの一期先輩から児童数が急増した、いわゆる団塊の世代の始まりで、これまでの1学年1学級から1学年2学級となり教員数も増えた。校長先生を含め教員数は15人程だったと思う。その内、白保出身の先生が半数以上占めていた。女性の先生は、福仲文、宮里ルリ、仲宗根弘子先生、男性の先生は、金嶺功、内原勇、大島彦光、仲宗根一雄、久高利男、石垣繁先生がおられ、20歳から30歳代の新進気鋭、熱血気鋭のサラバンジだった。学校では先生と生徒の関係であったが、放課後は先輩後輩、親戚縁者の間柄で生活指導、人間教育、陸上競技、少年野球等に熱心だった。特に他校との対抗競技には、他校に負けるな！　白保健児の意気軒高、文武両道の精神をたたき込まれた。

「授業の思い出」

校長先生は崎山潤先生で、当時は珍しくオルガン弾きに秀でた希少な音楽家校長だった。校長先生は担任が病休の際は臨時に授業に来られた。校長先生の授業はほとんどが、安寿と逗子王、ベニスの商人、ああ無情、二宮金次郎、野口英世の人情物語り、努力教育の読み聞かせで、今思うと人の道を教えてもらった。

1年生と2年生の担任は成底秀先生だった。秀先生の授業で今でも鮮明に覚えているのが八重山民謡の「月ぬ美しゃ」子守唄である。特に「コネマヌナーヤ　ノウテドゥターボラレ」「コネマヌ　ナクカー　アンマーンナーキドゥスー」の歌詞である。当時は意味も知らずに歌っていた。今、大人になって、子育ての大事さ、親子の愛情を実感できるようになった。秀先生の人柄と教えの深さを実感している。

3年生の担任は成底方新先生だった。方新先生はいつも笑顔を絶やさず、授業の始めは手品マジック、笑い話しで生徒の関心を引き立てて授業を始めた。特に印象に残っている授業は「かけ算」である。かけ算を早く覚えた生徒、問題の正解が出来た生徒は教室の外で遊べる自由の特典が与えられた。学校の楽しさ、勉強の分かる楽しさを教えてもらった方新先生の授業は私のその後の生き方に大きな影響を与えてもらった。

5年生から家庭科の授業が始まり、担任は仲宗根弘子先生で、調理実習で料理したバラずしの味は今でも忘れられない思い出で、イモ食時代のバラずし授業は特別な思い出である。

70歳の人生を経て今、思う事は、幼少の頃の環境、体験、出会い、教育がいかに大事であるか、つくづく思う。白保で生まれ育ち、白保小学校で学び、教えてもらった事は本当に幸せである。白保は世界一の郷里、世界一の白保小学校だと思っている。「みるく世は給られ」、白保村、白保小学校の発展を祈念してやまない。

（中城村在住）